



# 感染症とたたかう

第1号

2015年  
12月発行

発行：国立大学法人 長崎大学 監修：長崎大学病院 感染制御教育センター長・教授 泉川 公一  
お問い合わせ：長崎大学熱帯医学研究所 〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4 TEL：095-819-7800（代表） FAX：095-819-7805

## ● 私たちの暮らしと感染症 ●

# インフルエンザの季節に 備えましょう

インフルエンザが流行する季節になりました。日本では年末の12月から翌年3月にかけて流行し、毎シーズン約1000万人が発症しています。いったん流行が始まると、短い期間で多くの人に感染が広がるだけに、自分自身を守るだけでなく、家族や周囲の人にうつさないようにするためにも、予防がとても大切です。

### ウイルスが原因で突然高熱になる こまめな手洗いが感染予防の第一歩

インフルエンザは、インフルエンザウイルスに感染することによって起こる病気です。突然、38℃以上の高熱となり、頭痛や関節痛、筋肉痛、倦怠感など、からだ全体に症状が現れます。また、鼻水、咳、のどの痛みなどの症状もみられます。これに対し普通の風邪の多くは、のどの痛みや鼻水、くしゃみ、咳などが中心で、全身の症状はあまりありません。

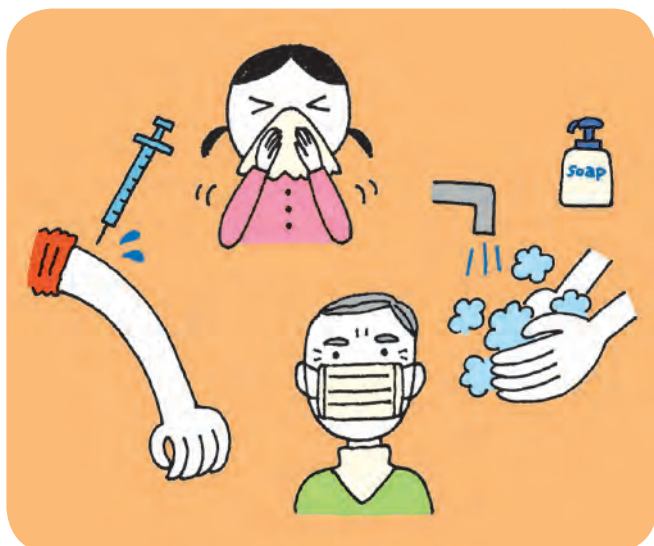
インフルエンザウイルスに感染する経路は、飛沫感染と接触感染の2つです。飛沫感染は、感染した人の咳やくしゃみ、会話などでウイルスを含んだしぶき（飛沫）が飛び散り、それを口や鼻か



ら吸い込むことで感染することです。接触感染は、感染した人の咳やくしゃみ、鼻水などの飛沫が付いた本人の手や、ドアノブ、スイッチ、手すりなどに触れることで感染することです。

感染を予防するには、この2つの経路に注意し、遮断することが必要です。そのためには、こまめな手洗いと、手で目、鼻、口に触れないことが大切です。特に、外出からの帰宅時や、咳・鼻かみ・くしゃみの後に、心がけるようにしましょう。また、マスクの着用も効果的です。

自分がインフルエンザになったときは、周囲の人にうつさないために、最初の数日間には会社や



学校を休むなど外出を控えます。咳やくしゃみをするときには、ティッシュで鼻と口を覆い、そのティッシュはすぐにゴミ箱に捨てる、それができない場合は自分の肘の内側に向かって咳やくしゃみをして、しぶきが飛び散るのを抑えるという「咳エチケット」を守りましょう。

### ワクチンは毎年早めの接種を 子供と高齢者では特に重要に

インフルエンザの予防として最も重要なのがワクチンの接種です。ワクチン接種によって、ウイルスに感染してもインフルエンザの発症を抑えること、発症しても重症化を防止することに有効との報告があります。小学生から大人までの年代なら高い確率でインフルエンザの発症が抑えられます。高齢者ではこの確率が低くなりますが、重症化を防ぎ、インフルエンザによる死亡を一定程度阻止する効果があるとされます。

ワクチン接種は、地元の医療機関、かかりつけ医などで受けられます。受けられる期間や費用については、保健所、医師会、かかりつけ医などに問い合わせてください。

インフルエンザの予防では、体のコンディションを良好に保つことも大切です。十分な睡眠、バ

ランスの良い食事とビタミン補給、体調を整える適度な運動などを心がけましょう。また、人ごみではウイルスを持っている人の咳やくしゃみの飛沫を吸い込む危険が高くなるので、流行している時期には不要な外出はできるだけ避けましょう。外出時にはマスクを着用し、帰ったときには手洗いやうがいを忘れずに。

### お茶やスープなどで水分補給 高齢者や乳幼児は早めに受診を

インフルエンザの症状の特徴は、突然の高熱や頭痛、関節痛など全身の症状です。インフルエンザにかかったと思ったら、まず安静にして、体力を失わないよう、睡眠と休養を十分にとることが大切です。発熱などで体の水分が失われているので、脱水状態にならないよう、水分を十分に補給しましょう。水でなくても、お茶でもスープでも飲みたいものを飲むようにします。

咳やくしゃみなどの症状のあるときは、周囲の人にうつさないためにマスクを着用し、人ごみや繁華街への外出を控え、無理をして学校や職場等に行かないようにしましょう。

インフルエンザの治療薬には、『タミフル』『リレンザ』『ラピアクタ』『イナビル』などがあります。ただし、インフルエンザの症状が出始めてから48時間以内の投与が必要です。そのため、上記のような症状が出たら、速やかに医療機関を受診してください。インフルエンザ感染後に、肺炎などを併発し重症化する可能性の高い人たち（ハイリスクグループ）がいます。65歳以上の高齢者、妊娠中の人、乳幼児、慢性の呼吸器疾患や心疾患の人などです。この方たちは、特に注意が必要です。

次号(2016年1月号)では  
「ノロウイルス性胃腸炎」を取り上げます。

# 長崎大学熱帯医学研究所

熱帯病の研究を専門とするわが国唯一の研究教育機関

長崎大学熱帯医学研究所（熱研）は、熱帯病の研究を専門とするわが国唯一の研究教育機関として、熱帯病をはじめとする熱帯地域の健康問題、特に感染症対策を中心に「地域社会への貢献」を目的に、研究と教育を行ってきました。

熱研のルーツは、1942年（昭和17年）に開設された、長崎医科大学附属東亜風土病研究所にさかのぼります。終戦後の1946年に風土病研究所として再興し、1967年に長崎大学附置熱帯医学研究所と改称されました。同時に研究所の建物も増築され、活動の幅が広がりました。開設以来、熱帯医学を志す研究者や学生が、熱研を拠点として、熱帯医学の研究、教育、国際協力の各領域での事業を推進するため、日々努力してきました。

## 地域の社会的・経済的損失を防ぐ これが熱帯医学の医療貢献

熱研が対象としている熱帯病は、その地域に住む人々を苦しめている病気、主に感染症です。熱帯医学とは、その熱帯病の原因を突き止め、治療し、さらに予防法の研究を行う学問です。熱帯病によって健康を損なわれている人々を治療し、健康を守る方法を考えることは重要な目的の一つです。

しかし、熱帯医学には、もう一つ大切な目的があります。それは、熱帯病によって生じる地域の社会的、経済的損失を防ぎ最小限にとどめることです。

そのためには、その地域の住民がどんな暮らしをしているのか、熱帯病によってどんな損失をこ

うむっているのかを、現地に滞在して研究し、そこで得た成果を現地に還元することが重要になります。

熱研は、1964年に初めてアフリカに足を踏み入れて、医療活動とウイルス疾患の調査を開始しました。以来50年以上にわたり、ケニアを中心に東アフリカでの感染症の研究と現地の医療技術の向上に貢献してきました。また、1969年にはフィリピンのマラリアの研究を開始し、その後も、調査・研究を継続しました。

## ケニアに常駐型研究施設を設置 生活環境の問題解決に取り組む

数十年にわたってアフリカやアジアの熱帯病を継続的に研究してきたとはいえ、実際には長崎の熱研を拠点に、長崎と現地を行き来して、調査・研究を行うのが実態でした。熱帯病の多くは、ウイルスや細菌、寄生虫などによる感染症ですが、な



熱帯病の研究を専門とするわが国唯一の研究教育機関である熱帯医学研究所。ここを拠点にアフリカや東南アジアなど現地での調査・研究が進められている。



ぜ感染するのか、感染源はどこか、感染経路はどうなっているのかを追究するためには、住民の生活習慣や風習、文化も知り、それがどういう影響を及ぼしているのかについても調べる必要があります。それには、現地に常駐し、住民の生活を見守ることが欠かせません。

研究者のそうした思いは、2005年にケニアに設置された常駐型拠点として結実しました。現地の研究者とともに、熱帯病の背景となる社会的、経済的な問題も含めて、熱帯医学の研究が大きく

進むことになりました。

現在では、ケニアとベトナムに研究拠点を置き、マラリアや住血吸虫症、トリパノソーマ症、コレラ、デング熱、黄熱、小児の呼吸器感染症や下痢症などについて、現地の研究者と協力して幅広い研究を展開しています。また、それぞれの拠点の周辺の国々でも調査活動を行っています。

次号(2016年1月号)では「長崎大学病院呼吸器内科」を紹介します。

## 新興・再興感染症

# フィラリア症

## ノーベル賞をきっかけに「顧みられない熱帯病」として注目

2015年のノーベル生理学・医学賞を、北里大学特別栄誉教授の大村智氏が受賞しました。授賞理由は「寄生虫による感染症に対する新しい治療法の発見」です。大村氏と共同受賞者のウィリアム・キャンベル氏は、感染者の2割が失明するといわれるオンコセルカ症(河川盲目症)や足などが肥大して歩行が困難になるリンパ系フィラリア症(象皮病)などの熱帯病の画期的な治療薬「イベルメクチン」を開発したことの貢献が評価されました。

フィラリア症は、フィラリアという寄生虫によって発症する病気で、寄生虫を持つ人を刺した蚊が、次に別の人を刺すことで寄生虫が侵入し、感染が拡大します。フィラリア症を発症すると、リンパ系に大きなダメージが起こり、足が象のように大きく腫れる「象皮病」などの障害を発症することがあります。

この「リンパ系フィラリア症」は熱帯・亜熱帯の73カ国で1億2千万人以上が感染しているといわれます。ところが、熱帯地域の貧困層を中心に蔓延しているため、世界から関心が向けられず、十分な対策がなされていない「顧みられな

い熱帯病(NTDs)」と呼ばれる病気の一つになっています。イベルメクチンは、このNTDから多くの人を救ってきました。

実はリンパ系フィラリア症は、かつて日本でも九州や南西諸島を中心に蔓延していました。幕末の英雄、西郷隆盛もこの病気で、陰囊が異様に腫れ上がっていたといわれています。熱帯医学研究所(熱研)の前身である東亜風土病研究所は、第二次世界大戦後は、国内の風土病に研究を移しました。そして、熱研の研究者をはじめとする多くの研究者によって、沖縄を中心に南日本に多い風土病ともいわれたフィラリア症は、わが国では撲滅されたのです。

しかし、世界では、昆虫やダニ類が媒介する感染症は数多く、フィラリア症も再興感染症として警戒する必要があります。熱研では、フィラリア症をはじめとするNTDsの研究に多くの研究者が取り組んでいます。

次号(2016年1月号)では「エボラウイルス病」を取り上げます。